

サポート

No. 215

令和8年3月23日発行

県教育庁特別支援教育課指導チーム

祝卒業

厳しい寒さも少しずつ和らぎ、柔らかな春の気配が感じられる3月を迎え、県内の各特別支援学校では、卒業式が行われました。今回はその中から、秋田きらり支援学校、比内支援学校、能代支援学校の卒業式の様子を紹介します。

秋田きらり支援学校

令和8年3月11日(水)、柔らかな日差しに包まれながら、秋田きらり支援学校では卒業式を挙行了しました。今年度は小学部7名、中学部9名、高等部13名、計29名の児童生徒が卒業を迎えました。卒業生一人一人が、それぞれの方法で呼名への返事をして演台の前まで移動し、松井智子校長から温かい言葉とともに卒業証書を受け取りました。

式辞では、松井校長が卒業生との思い出や行事等で頑張っていた姿、各学部でのそれぞれの成長を紹介し、きらり祭で高等部が歌った「手紙」の歌詞を引用して「笑顔を見せて今を生きていこう」と卒業生にエールを贈りました。答辞では卒業生代表が、これまで支えてくれた家族や関係機関の方々への感謝の言葉を述べました。コロナ禍以降、初めて卒業生と在校生が向かい合って「旅立ちの日に」を合唱し、元気な歌声が響き渡りました。たくさんの保護者、来賓の皆様からの祝福を受け、心温まる卒業式となりました。



【卒業証書授与】



【校長式辞】

(秋田きらり支援学校 副校長 高橋 省子)

比内支援学校

令和8年3月6日(金)、ハレの日にふさわしい青空の下、達子森に降り注ぐ光に春の訪れを感じながら、比内支援学校において卒業式が行われました。今年度の卒業生は、小学部3名、中学部5名、高等部17名の計25名でした。

伊藤登美子校長より卒業証書が授与され、車椅子の生徒も壇上で一人一人立派に証書を受け取りました。伊藤校長は式辞で、「誇りと自信に満ちあふれた表情を見ると、皆さんの成長と学校生活が充実したものであったことを確信し、嬉しく感じました」と述べました。そして、高等部3年生に向け、「よさこい・絆・舞桜」の歌詞を引用して「未来に夢や希望をもち、働く大切さや楽しさ、喜びを感じながら自らの豊かな生活を切り拓いてほしい」とエールを送りました。

全校児童生徒による「呼びかけと歌」では、卒業生は「地域で『本物』を学び、自分自身を成長させることができた学校生活」と感謝を伝え、「それぞれが自立を目指し、新しい道を切り拓きます」と決意を話しました。最後に全員で「旅立ちの日に」を合唱し、退場時には感極まり涙する児童生徒も複数見られ、温かい雰囲気の中、25名は巣立っていきました。



【卒業証書授与】



【校長式辞】

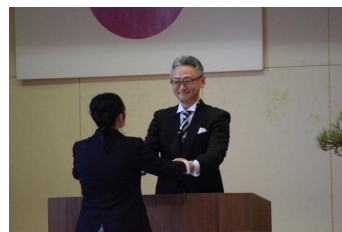
(比内支援学校 教頭 加藤 宏和)

能代支援学校

令和8年3月6日（金）、能代支援学校では小学部4名、中学部8名、高等部19名の卒業生一人一人に卒業証書が授与されました。

式辞では、佐藤圭吾校長より、これまでの思い出とともに、各学部の卒業生に向けてはなむけの言葉が贈られ、これから社会に旅立つ高等部卒業生に向けては、「どんなに辛く、苦しくても、目の前の状況は変えることができる。自分の可能性を信じ、成長を確かめ、他者に貢献できる人になってほしい」という激励の言葉が贈られました。

卒業生と在校生による「旅立ちのことば」では、卒業生が学校生活を振り返るとともに、家族や地域の皆さん、教職員に感謝の言葉を伝え、在校生からは「未来を拓け！」というエールが送られました。最後に出席者全員で校歌を斉唱し、温かい拍手とともに卒業生を送り出し、一人一人の笑顔輝く門出となりました。



【卒業証書授与】



【校長式辞】

（能代支援学校 教頭 佐藤 香代子）

特別支援学校の特色ある取組紹介

「八戸盲学校とのオンライン交流」による共同学習について～視覚支援学校

東北地区盲学校・視覚支援学校7校による小学部合同のオンライン交流がスタートして5年目になりました。今年度は、さらに、本校児童4～6年3名と、八戸盲学校4年、6年児童2名、計5名での単独交流を行いました。小学部高学年の教科等の学習を関連させて行った授業です。

4年生国語科単元「工芸品のみりょくを伝えよう」、社会科単元「地域で受けつがれてきたもの」、5・6年総合的な学習の時間の単元「修学旅行へLet's go!」のまとめとして、作文を発表したり、修学旅行の思い出を伝えたり、クイズで地域の特色や特産物を紹介したりする活動での交流です。自分たちが体験したり、調べたりしたことをお互いに発表し合うことで、知識の定着を図るとともに、新たな気付きや関心を広げることが目標としました。

事前の打合せで検討、確認したことは、見えにくさから画面越しの相手の表情や提示資料を視認することは難しいため、基本的な情報入手は明確な音声による説明と、事前に送付し合う資料を手元で拡大して見ることです。本校の児童にも、相手に伝わるように説明するため、読み方の練習をする時間を設けました。

交流当日、両校児童らは、本校の「曲げわっぱの魅力」について書いた作文、「修学旅行報告（岩手県）」、八戸盲の「修学旅行報告（北海道）」の発表により、各地に様々な見所や特色、特産品があることに関心を寄せていました。さらに、今回は、本校の来年度修学旅行候補先となっていた青森県について知る活動として、八戸盲から児童考案のクイズ（これがかなりの難問でした）を出題してもらいました。青森県について一生懸命考え、答える姿が見られ、まだ知らない日本各地の特色や魅力を知ることへの期待感が高まったようでした。

コロナ禍で進んだオンライン交流ですが、少人数化の波をとらえながら、児童同士の学習の一つの機会として、今後も交流授業の在り方を模索していきたいと考えています。



【青森県民クイズは難問だけど面白い！】

（視覚支援学校 教諭 坂本 由起子）

寄宿舎におけるオンライン交流～栗田支援学校

本校寄宿舎では、5年前よりオンライン交流を開始しました。ICT活用推進の流れや新型コロナウイルス感染症の流行により対面での交流が難しくなったことを受け、その打開策として始まった取組です。初年度はゆり支援学校と秋田公立美術大学との交流でした。その後、聴覚支援学校、比内支援学校、大曲支援学校が加わり、年々、交流の輪が広がっています。

ICTを活用したオンライン交流は、距離や移動の制限を受けずに手軽に交流できる点が大きな強みです。一方で、生徒にとっては不慣れなツールでもあるため、本校寄宿舎では「ICTに親しむ」こともねらいに、事前学習や準備の機会を大切にしています。事前学習では、前年度の交流動画を視聴したり、実際にZoomなどのWeb会議システムに接続したりして、音声の聞こえ方や伝わり方、画面への映り方などを確認しています。事前準備では、生徒自らがiPadで撮影や編集を行い、主体的に寄宿舎紹介動画を作成しました。

交流前には、各校で事前アンケートを実施し、なるべく生徒の要望に沿った内容になるよう心掛けています。その結果を基に、交流相手校の担当間で話し合い、生徒の実態や学校の特色等を踏まえながら交流内容を決定しています。舎食や行事の紹介、質問コーナーの他、オンラインでも楽しめるゲームを行ったり、洗濯や衣類収納など、自立に向けた取組を紹介したりしています。また、相手校によっては、日常会話などの手話を教えてもらったり、顔なじみの先生に余暇で練習したけん玉を披露したりするなど、幅広い交流内容を検討し、実施しています。

生徒からは「他校の寄宿舎の友達ができてうれしい」「懐かしい先生に会えて良かった」など、他校とのつながりを実感する感想がたくさん聞かれています。今後も内容を工夫しながら、寄宿舎生活の充実と学校間のつながりのより一層の広がりを目指して実施していきたいと考えています。



【交流に参加する生徒】



【他校の寄宿舎に興味津々】

(栗田支援学校 寄宿舎指導員 花田 滝)

お知らせ

今夏、「第50回全国高等学校総合文化祭（あきた総文2026）」が開催されます。「文化部のインターハイ」とも称される大きな祭典です。特別支援学校部門では、ステージ発表や美術展・写真展、作業学習製品販売等により、日頃の学習の成果を発表します。

現在、大会を運営する生徒実行委員会が、公式 Instagram で活動の様子やイベント情報を発信しています。秋田県全体で大会を盛り上げるため、アカウントのフォローと、投稿の拡散にご協力をお願いします。

【アカウント名】

・あきた総文2026 (@akita_soubun_2026)

